CORE Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

45. Gerhard Domagk の業績 —医学・生理学ノーベル賞受賞 75 年後の地域医療への貢献—

[1] 医学部5年,
[2] ウェストファーレン・ウィルヘルム大学,
[3] 国際協力支援センター 日独連携推進室
山内茉由莉[1], 濱口眞衣[2], 橋本佑介[1],
宮一佑衣[1], 和田善光[1],
Med. Klinik & Poliklinik B Dirk Domagk [2],
IfAS Jan C. Becker [2], 増田道明[3],
Wolfgang Roland Ade[3]

【緒言】2014 年は Gerhard Domagk がサルファ剤の化学抗菌作用発見によりノーベル賞を受賞してから 75 年という記念すべき年になっており, 没後 50 年にもあたる. Domagk はウェストファーレン・ウィルヘルム大学（通称：ミュンスター大学）の一般病理学・病理解剖学教授として, 教育・研究に携わっていた. そこでミュンスター大学は 2014 年を「ドマク年」と名付けている. 我々は, ミュンスター大学での研修に際し, 医学・医療に対する Domagk の貢献を様々な観点から調べて, 考察した.

【方法】ミュンスター大学構内に保管されている Domagk に関する文献や資料を閲覧したり, 関係者の話を聞いたりして情報を収集した. また, Domagk に関する文献や資料をインターネット上で検索し, 調査した.

【結果・考察】Domagk はアゾ染料である赤色プロントジルに化学抗菌作用があることを発見した. この業績により, 1939 年にノーベル医学・生理学賞を受賞している. この発見は細菌感染症に対する化学療法の先駆けとなっただけでなく, 他の抗菌薬を開発する上での礎にもなった. ペニシリンを発見したフレミングも Domagk の業績を讃えている. その他, サルファ剤の開発や現在も抗結核薬として使われているイソニアジドの臨床試験などを通じて, 感染症の化学療法確立のために中心的な役割を果たした. また, 癌治療の理論, 特に癌に対する免疫療法の概念を提唱したことも知られている.

一方, 抗菌薬を適切に使用することの重要性も早くから説いていた. 抗菌薬の濫用による種々の薬剤耐性菌の発生が問題となっている現状を 50 年以上も前から予期し, 警鐘を鳴らしていたと考えられる.

【結語】20 世紀初頭, 感染症は死に至る病とされ, 専門医療機関での対応が必要であった. 一方, Domagk は強力な抗菌薬の発見と耐性菌発生予防の奨励により, 感染症を地域医療の枠の中で対処可能なものとすることに大いに貢献した. このことからも, 現代の地域医療の在り方や意義に大きな影響を与えたと言えるのではないだろうか.

46. Overview of the Philippine Health System

[1] 医学部3年, [2] 国際環境衛生室,
[3] 熱帯病寄生虫病学
小杉怜史[1], 添田　眞[1], 宇賀神若奈[1],
賀来　愛[1], 鈴木紫穂[1], 御子柴颯季[1],
森　晴奈[1], 大平修二[2], 林　尚子[3]
千種雄一[3]

【目的】海外研修を通して学び得た, フィリピン共和国の保健と医療制度及び感染症対策を含めた地域医療政策について報告する.

【方法】現地の各医療関連施設での実地研修・臨床実習による.

【結果と考察】今回, フィリピン・レイテ島での研修においては, 昨年の台風 30 号による爪あとが未だあちこちに見られた. 自然災害時の医療者の活動, 復興・支援状況について研修し, 長い期間で復興を支援する必要性と災害時の各国の連携の大切さについて再考させられた.

フィリピンでの地域医療従事者不足は深刻であり, その対策の一つとして, 地方から推薦された学生を奨学金によりその生活までも保障する国立フィリピン大学健康科学部（SHS）がある. SHS では医療従事者育成教育をステップラダー方式と呼ばれる教育制度により行っている. この方式では, 助産師 ⇒ 看護師 ⇒ 医師の資格を順次に取得することができ, それぞれの段階のカリキュラム終了後に助産師或いは看護師として一生勤務することも可能である. 卒業後は, 各医療職として修業年限の 2 倍の期間を地域で活動する義務がある. このように地域に根ざした助産師, 看護師, 医師の育成を行い地域医療に貢献している. その他の地域医療対策として, Medical Mission がある. これは, 保健省の医師を中心に Medical Mission と称する医療チームを組織し, 通常は医療サービスが充分行き渡らない地域住民や経済的理由で受診できない住民への出張無料診療・医療相談を実施するものである.

感染症に関しては, 日本ではほぼ見られなくなったフィラリア症, 日本住血吸虫症, 狂犬病等が猛威を奮っており, Animal Bite Center を設けるなど, それぞれについての対策が行われていた. 我々は, 実際に日本住血吸虫症対策としての Mass Drug Administration（有病地域住民をすべて対象とした集団駆虫）やフィラリア症における象皮病ケアを研修し, これらの感染症対策の重要性を再認識した.

【結論】フィリピンの医療現場を見て, 実際に患者と触れ合い, また, 多くの医師や看護師, 助産師の方々からの話を聞くことにより, 日本と違った, フィリピンの医療問題を深く考えることができた. 満足な医療環境が得られない中では, 改めて人と人とのつながりの大切さを実感した. このことは, 日本の医療環境においても重要であると考える.